

第8章 社会学の研究例

社会学についても私は専門ではありません。そこで、今回は、大塚久雄による「社会科学の方法」という著作を中心にお話ししたいと思います。ご紹介する研究者は、主にマックス・ヴェーバーです。カール・マルクスにも少し登場してもらいます。

あらかじめお断りしたいのは、マルクスもヴェーバーも、それぞれ沢山の研究業績を残した研究者で、私のような素人が、お話すためには、その膨大な文献をある程度読むべきです。ところが、それが現状ではできていないので、大塚久雄に登場してもらいます。ところが、大塚久雄自身も、日本を代表する歴史経済学者であり、その著作も沢山あります。

できるだけ丁寧に扱い、私なりの観点からお話ししたいと思います。しかし、こうした事情から、絶対的な勉強量が専門家よりもずっと少なく、残念ながら誤解や間違いがあるかもしれません。学生の皆さんからも問題点や疑問を沢山指摘してもらえたらと思います。

8.1 はじめに—問題点

科学のABCの方法は、実験科学の発想であるので、どうしても理系的な発想のように思えます。ところが、学問分野には、当然、いわゆる文系の学問もあります。社会科学や人文科学と呼ばれる分野がそれです。こうした学問分野についても科学のABCの方法を適用できるでしょうか。

そこで、今日のテーマの一つめは、

- 1) 社会科学(いわゆる文系分野)の研究と、自然科学の研究は、同じように科学のABCが適用できる実験で確かめることができるのか。

です。

この点については、後でも述べるように見解が分かれるところです。しかし、ある基準を設けて、実験科学を2つのグループに分けることができるようにも思います。そこで、2つめのテーマは、

- 2) 社会科学を念頭に置いたとき、実験科学はどのように分類されるのか。

です。

こうした題材を扱うのに、マックス・ヴェーバー(1864-1920)が書いた著名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を扱って考えます。この論文は、資本主義とキリスト教について扱ったものです。この論文が成立する前提知識が私たちには欠けていると思われるので、問題設定を東洋人(日本人)ばく変えてお示ししましょう。

- 3) 資本主義的な金儲けて、キリスト教の立場からしてアリなのか。

です。資本主義に基づく経済活動は、世界中に広まっています。時には、それはかなり露骨な金儲けとして私たちの目に映ります。一方で、資本主義が誕生したヨーロッパでは、キリスト教が広く流布しています。キリスト教は、そのような露骨な金儲けを許すような宗教なのでしょうか。

8.2 社会学とは

本題に入る前に、一つ、強調したいことがあります。それは、高校の学びと大学の学びについてです。大学で勉強すること、特にリベラルアーツ学群の各専攻の科目は、高校の授業と対応関係がありそうな科目があります。英語・英文学専攻や数学専攻はその例です。ところが、そうでない専攻もあります。例えば、心理学専攻です。高校では心理学を学びません。高校で学んだ学問分野については、ある程度のイメージを持つことができます。しかし、そうでない分野は注意が必要です。最初はそれを学ぼうと思っても、学び始めたら違っていた、ということがあるからです。

社会学の場合は、高校で学ぶ「現代社会」が比較的近いです。しかし、自分が学びたいと思った学問分野については、あらかじめ丁寧にどのような学問であるかを確かめておくことをお勧めします。

それでは、社会学とはどのような学問分野でしょうか。岩波書店の広辞苑には次のように書かれています。

人間の行為や文化と関連づけながら、共同生活の構造や機能、社会の変動について研究する学問。

人間をベースに、社会のことを考える学問であると言えますが、ここで、一つ、注目したい点があります。それは、「社会の変動」に力点が置かれていることです。社会が変動するときには、何らかの原因があって、その結果として変動が起こると考えれば、これは、いわば検証のための実験としても機能するようにも思えます。実験ができるのであれば、社会学も、広い意味での実験科学と位置付けられるのではないのでしょうか。

このような社会学は、比較的、最近、誕生した学問です。実験科学としての自然科学の起源を、例えばガリレオ・ガリレイ(1564年生まれ)に求めたとし、社会学の起源を、例えば、後述するマックス・ヴェーバー(1864年生まれ)に求めたとしましょう。すると、この二人の生誕年は300年違いますので、学問の歴史も300年違うことになります。実験科学には400年程度の歴史があるのに対し、社会学には100年程度の歴史しかありません。

8.3 プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

もう一つ、今回の話題の前提知識について、簡単にまとめてお話しします。それは、カトリック教会とプロテスタントについてです。このような話は、キリスト教徒が多い欧米では常識的な話ですし、本学の「キリスト教入門」でもそのような話の説明があるのではないかと思います。念のために、ここで確認しておきましょう。

キリスト教の起源は、およそ2000前に活動したイエス・キリストにあります。キリストは弟子の一人ペトロ(「岩」の意味。ペテロと表記することもある)について「わたしはこの岩の上に私の教会を建てる」と言いました。こうしたこともあって、ペトロはキリスト教布教の重要な役割を果たすこととなります。ペトロは初代教皇と考えられ、ペトロ以降、教皇がキリスト教の教会の最高権威となります。教皇については、東方教会との分裂などもありますが、基本的には継承され、2019年11月に来日する教皇フランシスコは第266代です。

これだけ長い間、権威の中枢として存在し続けると、制度そのものが腐敗することは、ありがちなことです。実際、教皇を含むカトリック教会でもそのようなことがありました。典型的な例は「免罪符」です。献金してこれを受けると(これをかうと)罪が許されるとする免罪符は、教会の資金源となったことがあります。このような腐敗に声を上げた人々は、宗教改革を起し、カトリック教会とは別の教会を設立しました。プロテスタントです。プロテスタントは抗議する人の意味です。プロテスタントの中にもいくつもの会派があります。

ヨーロッパでは、カトリック教会とプロテスタントの両方が、それぞれ多くの信徒を抱えています。しかし、地域性があります。例えば、イタリア、スペインといった国々では、カトリック教会の信者が多く、スウェーデンやデンマークといった国々では、プロテスタントの信者が多くいます。本学と縁が深い日本基督教団は、日本におけるプロテスタントの集団です。

お待たせしました。それでは本題に移りましょう。マックス・ヴェーバー (1864-1920) は、社会学と呼ばれる学問分野で重要な仕事をした人です。そして、その中でも、著書「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は、広く読まれています。この本の趣旨は、後ほど述べるとして、とりあえず、本書を開いて、この講義で勉強している科学の ABC の観点に沿うような記述があるかどうかを検討してます。

すると、科学の ABC で語れるような内容がいくつもあることに気づきます。例えば、次のような内容です。

A ヨーロッパの近代的な企業では、プロテスタントの方がカトリックよりも所得が多い(より重要な仕事をしている)のはなぜか？

B 信仰の種類の違いというよりは、信仰とリンクした民族や文化の発展程度が違うのである。

C (民族や文化の発展程度が同程度と考えられる) 同じ国の中で、プロテスタントとカトリックの所得の平均値を比べてみる。平均値がさほど異ならなければ、仮説は支持される。

実際に、この著書の中では、ドイツのバーデンで、1885年のデータが掲載されています。「資本収益税の課税対象になる資本額」についてのデータですが、ざっくり、金持ちの割合と考えていいでしょう。どうやら、1つの国の中でも、プロテスタントとカトリックで金持ちの割合が異

信仰の種類	資本額
プロテスタント 1000 人	954,060 マルク
カトリック 1000 人	589,000 マルク

表 8.1: 1000 人の資本額 (バーデン、単位は%)

なるようです。それでは、どうして、このような違いが生じたのでしょうか。これも ABC に対応したような記述が見られます。

A どうして、プロテスタントの方がカトリックよりも金持ちなのか。

B 親が子供にする教育が異なるからである。

C 信仰の種類毎に各種学校の進学率を比べてみる。プロテスタントの方が実務系の学校への進学率が高ければ、仮説は支持される。

次のようなデータが示されました¹ これを見ると、人口の割合に比べて、プロテスタントの方が高等教育機関の、特に実業的な学校に進学している割合が高いとわかります。しかし、これは根本的な解決にはなっていません。なぜ、プロテスタントの親は、子供に実業系の教育をしようとするのでしょうか、

この点について、ヴェーバーは次のようなことを述べています。

カトリシズムが「非現世的」だとか、プロテスタンティズムが唯物主義的な「現世のたのしみ」をふくんできるとか、その他の様々な漠然とした観念によっては、とうていこの問題を解くことはできない。

¹実業高等学校の数字が誤っているような気もしますが、テキストのまま掲載します。

学校の種類 \ 信仰の種類	プロテスタント	カトリック	ユダヤ人
高等学校	43	46	9.5
実業高等学校	69	31	9
高等実業学校	52	41	7
実業学校	49	40	11
高等小学校	51	37	12
人口の割合	37	61	1.5

表 8.2: 高等教育機関での信仰の種類 (バーデン、単位は%)

私なりにこの言葉を表現しなおすと、そんな大雑把な印象だけで判断するのは止めて、もっと丁寧に論証すべきですね、ということです。印象だけ語らず、そういった仮説があるのであれば、何らかの検証を行って確かめるべきではないか、という主張であると私は理解しました。まさに、科学の ABC の考え方です。

同時に特徴的なのは、統計データを用いて議論していることです。統計データの扱い方については、シェルドレイクの実験のところでも触れました。生物学的な実験だけではなく、こうした社会学の場合にも統計学が大事であることも強調しておきます。

最終的な結論については、本筋ではないので、また、キリスト教の歴史や、宗派による考え方の違いに足を踏み入れなければ解説できませんので、簡単に紹介するだけにしましょう。プロテスタントの、中でもカルヴァン派と呼ばれる宗派は、仕事を天職とみなして働き、なおかつ、禁欲的であるので、お金を使わなかったと考えられます。そして、こうした活動のために、資本(お金)がたまり、資本主義に合致した経済活動に好適だったので、資本主義がより進展したと考えられる、ということです。興味がある人は、ぜひ、自分で読んでみてください。

改めて、ここで指摘したいのは、ヴェーバーが丁寧に ABC に対応したような議論の仕方を積み重ねている点です。私たちがこれまで勉強してきた ABC と同様に考えて良さそうにも思います。

8.4 社会科学の方法

それでは、社会学を含む社会科学でも、自然科学と同じような方法を展開することが可能でしょうか。社会科学が自然科学と最も異なるのは、社会科学が研究対象とするものには、人間活動が含まれているという点です。人間活動が入ってくるようなものを、科学として扱うことができるのでしょうか。

この点について、著書「社会科学の方法」の中で大塚久雄が議論を展開しています。

まず、カール・マルクスについて述べています。マルクスは「資本論」(岩波文庫で9分冊)や「共産党宣言」などの著作で知られ、共産主義を掲げた人です。マルクス経済学という経済学の一つの系譜を作った人でもあります。大塚の説明するマルクスの考え方は、大まかには次のとおりです。

自然に任せた人間活動で生じる生産物は、人間から独立してしまって、あたかも自然現象と同様になってしまう。そのために、自然に法則があるのと同じように、そこには法則性が現れる。いわば第二の自然として扱えるので、科学的認識ができるようになる。(ただし、議論を展開するとどうしても「人間」が現れる必要が出てくるところが興味深い。)

人間の経済活動については、生産物を人間から独立して考えることができるようになるので、科学として扱える、というわけです。

ヴェーバーの場合は、やや異なったやり方で社会科学を構成すると、大塚は考えています。マルクスの場合には、経済活動の上に、様々な文化的なことがらが起こるとしてはいますが、ヴェーバーの場合には、相互に関連があるとしています。つまり、文化的なことがらと、経済的なことがらが、互いに影響を及ぼしあっていると考えます。ただ、このようにぼんやりとした記述では科学になりません。そこで、次の2つの観点で考えようというのです。一つは、マルクスや自然科学と同様に、原因と結果という関係という観点です。もう一つは、人間が目的をもって何らかの手段を選ぶ自由意志の観点です。通常、人間の自由意志が入ってくると、途端に科学として扱えないと考えがちです。しかし、ヴェーバーは、逆に、この自由意志があるからこそ、科学としてよりしっかりと成立すると考えます。なぜなら、物理法則には根拠がないのに、人間の自由意志を私たちは根拠付けて理解することができるからです。誰もが納得するような理由を見出せると考えたのです。

マルクスも、ヴェーバーも、大塚も、社会科学が科学として成立するとしています。

8.5 個別の科学

やや抽象的な議論になってしまいました。ここでは、もう少し別の観点から考えてみましょう。

大塚は議論の中で、気象学を例に取り出しています。社会科学と気象学は似ているというのです。そして、気象学が科学として成り立つなら、社会科学も科学として成り立つのではないかと論じています。

それは、具体的には、このようなことです。例えば、台風が関東地方に上陸したとします。このとき、どうしてそのコースが選ばれたのでしょうか。大気現象も物理現象ですから、何らかの理由があってそこを通ったはずで、近くにある高気圧の影響や、海水温、山の位置関係、などなど、様々な影響を受けてコースが決まったはずで、このように、個別の台風から法則性を導くのは難しいかもしれないけれど、法則を用いて台風を説明できる。社会科学も同様に考えることができるだろう。気象学が科学なら、社会科学も科学である、というわけです。

では、逆に、気象学は科学のABCとして考えることができるでしょうか。例えばこうです。

- A 台風がこのコースを選択したのはなぜか
- B 海面水温がちょうどこのコースを選ぶようになっていたからである。
- C 海水温だけを変えてコンピュータシミュレーションしてみる。台風のコースが変われば、仮説は支持される。

ところが、地形を変えても、まわりの気圧配置を変えても、どれを変えても台風のコースは変わるでしょう。そもそも、コンピュータシミュレーションで、現実と同じように台風が移動するか、大変疑問です。現実の台風だけを考える場合でも、気圧配置や海水温の分布が全く同じであるようなときは、まず、ありません。台風の性質については、物理法則（流体力学の法則など）を使って説明することはできるでしょう。しかし、個々の台風について何か因果関係を述べることは難しい状況があります。

社会科学も同様な側面があります。例えば、ヴェーバーは、バーデン市のデータを使って、上に議論したことを述べました。果たして、プロテスタントとカトリックの人口比率が同じ市があったとしたら、同じような分布になるでしょうか。そんなことはないでしょう。気候風土、経済の発達段階、近隣諸国との関係などなど、様々な影響を受けるでしょう。しかし、丁寧に議論すれば、何が影響しているのかを明かにできそうです。

どちらも、個別的で、どちらも、「全部が互いに関係している」で終わってしまいそうですが、丁寧にデータを扱うことで因果関係を特定することができそうです。こうした点が似ているというのが大塚の指摘です。

しかし、逆に、気象学も社会科学と同様に科学ではなく、「擬似科学」(科学のようなもの)であると考え人もいます。物理学者の池内了は、著書「疑似科学入門」で、気象学や地球温暖化論を「第3種の疑似科学」であるとしています。気象学や地球温暖化論は、そもそも科学で扱いにくいものであり、ちょっとした変化が大きく影響することがあるので、確実なことが言えないからです。

8.6 反証可能か

同じ本の中で、池内は科学哲学者カール・ポパーを紹介しています。科学が有すべき要件の第一は、反証可能であるである、ということです。これは、気象学や地球温暖化論、あるいは、地球科学全般、さらに社会科学や、人間の科学にとっては、これを満たすのは大変厳しい要件であると言えます。

例えば、地球の生命について考えましょう。人類を含む地球の生命の進化について、様々なことがわかっています。そして、因果関係として語られている部分もあります。しかし、地球とそっくりな星が、太陽の向こう側にあって、地球と一緒に太陽を回っていたとして、その星では地球と同じような生物が進化しているのでしょうか。その答えはわかりません。

その星では、日本列島ができていますでしょうか。同じような台風ができて、同じような時期に同じような場所を通るのでしょうか。

あるいは、同じ地球上で考えてみましょう。もしも台風の発生が3日ずれていたら、その台風は私たちの住んでいる場所を直撃したであろう、ということができのでしょうか。

自衛隊があるから外国からの侵略を防げた、という人がいます。自衛隊を設立しなかったら侵略してくる国があるのでしょうか。

今朝、皆さんは何を食べてきたのでしょうか。もしもパンを食べてきた人が、ご飯を食べていたら、頭の回転がよくなって、今日の授業内容がよく理解できて、テストの成績もよくなる、というようなことが言えるのでしょうか。もしも、大学の授業に参加するとき、バスに乗る前にコンビニでおにぎりを買っていたとしたら、そこで誰か素敵な人に出会っているかもしれません。そうでないと、誰が言えるのでしょうか。

どれもこれも反証不能です。1回だけの出来事であり、繰り返すことはありません。比較対象になるようなものはこの世に存在していません。

私はこれらを扱う学問をレベルの低い学問だ、とは言いません。しかし、科学のABCできちんと結論できない学問であることは指摘したいと思います。そして、そのような場合には、人間の何らかの価値判断が入りがちです。まして、自分自身の人生について考えるときは、合理的に考えることに加え、自分の価値判断に基づいて選択すること大事になってきます。

では、人はどのように選択するのでしょうか。また、人がすべき選択とは何でしょうか。それらは、科学のABCとどのように関係するのでしょうか。

8.7 行動経済学とは

NHKは、テレビシリーズ「白熱教室」で、世界各地の大学の講義を紹介しています。2014年、心理学・行動経済学に関連して、アメリカ デューク大学のダン・アリエリー教授による「お金と感情と意思決定の白熱教室」(全6回)を放映しました。この授業では、この番組の内容を中心に紹介したいと思います。

アリエリーが専門とする行動経済学とはどのような学問でしょうか。

ここで、前回紹介したセンメルヴェイスの話の思い出してみましょう。センメルヴェイスは、病原体についての正確な記述ではありませんでしたが、院内感染について仮説を立て、検証したところ、仮説が支持される結果を得ました。検証で支持されただけでなく、結果的に多くの人命が救われるようになりました。科学のABCの考え方は、合理的な考えであるので、これを多くの人が受け入れるだろうと考えるのは自然なことです。

しかし、残念ながら、センメルヴェイスは、暴行を受けて亡くなることとなります。人は、合理的な考え方に従って行動しているわけではなく、不合理な行動もします。既に、合理的な考え方の代表格である科学のABCの考え方を身につけた皆さんにとっては、このように不合理な行動をする人は不可解であると思うかもしれません。

アリエリー自身にも、人間が不合理な判断をすることについて疑問を思う体験がありました。アリエリーは、体の70%に火傷をし、入院治療を受けた経験があります。アリエリーは、このとき、苦痛について興味を持つこととなります。火傷の患部を覆う包帯を剥がすときは、とても苦痛であることは容易に想像できます。苦痛をより少なくするためには、包帯を一気に剥がす方がいいのか、それともゆっくり剥がす方がいいのか。皆さんはどちらと考えるでしょうか。

看護師は一気に剥がす方がいいと信じていたので、そうしていました。アリエリーはゆっくり剥がすことも試してほしいとお願いしました。しかし、その願いは聞き入れませんでした。

その後、大学で実験的な手法を学んだのちに、苦痛の研究をするようになります。その結果、次のことを発見します。

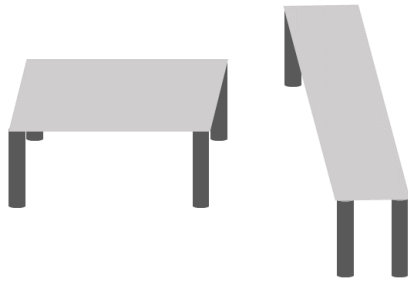
1. 苦痛の量は、継続時間にはあまり関係がない
2. 苦痛の量は、痛みの強さの変化の仕方に関係がある

人間は、不合理な判断をします。例えば包帯の剥がし方についての先入観にとらわれている、ということです。しかし、その不合理が指摘されても直らない場合があります。別の方法を試してもらいたいと言っても試してもらえませんでした。こうした体験が、アリエリーの研究動機の一つです。

人間の不合理は、学問としても深く考える必要があります。例えば経済学です。経済学では、人間が利潤（利益）を追求することを前提に、理論を組み立てます。ところが、人間がこのような不合理な行動をする場合には、それを考慮に入れて議論しなければなりません。行動経済学は、人間の不合理な行動を心理学的な手法を用いて明かにし、その結果どのような経済活動をするようになるかを考える学問です。心理学と内容が近く、また、比較的新しい学問分野です。

8.8 行動経済学・心理学で扱う事例

アリエリーは、デューク大学で行動経済学だけでなく、心理学も教えているとのこと。ここで、心理学についても少し紹介しましょう。心理学も比較的新しい学問分野です。しかし、心理学の領域は広く、そのすべてを網羅して紹介することは難しいです。ただ、簡単な例をあげることができます。次の図を見てください。図に示された二つのテーブルは、どちらが長いでしょうか。



実は同じです。この教材を印刷した人は、実際に上のテーブル部分を切り出して、重ねてみてください。一致することがわかると思います。この例について、どうして一方が長く見えるのか、また、どのようなときにこうした認識になるのか、また、こうした認識があるとする、他にどのようなことが起こると考えられるのか、といったことは、心理学の研究範囲です。

ここで、指摘しておきたい重要な点があります。私は、この二つのテーブルが同じ形であることを指摘しました。そして、皆さんもそれを納得できたと思います。ところが、それがわかったとしても、どうしても右側のテーブルの方が長く見えてしまいます。つまり、人間には、合理・不合理を越えて、その性質上、どうしてもそうなることがあるのです。

今日ご紹介するアリエリーの番組の内容は、「不合理な判断をする人間を合理的に行動するように変えよう」ではない、と私は思いました。むしろ、「不合理な行動をすることを前提に、どのような不合理があるのか、また、それに基づいてどのようなことをすれば社会がよくなるか、を考えていこう」という内容であると思いました。

また、比較的、新しい学問分野ですから、ABCによって確かめる、というよりは、むしろ、Aのみ、つまり、実験によって観察したことを確かめる、という実験が多いことも注意してください。

残念ながら、今日の授業内容はここまでにしましょう。続きは次回お話しすることにします。